

編集後記

2021年度は夏冬2回のオリンピックとパラリンピックが開催された年でした。しかも夏はパンデミック下での開催になり、冬は閉会直後にヨーロッパで戦争（侵略）が起こるという時代の開催になりました。年度内に開催が集中し、しかも世界の歴史が動く中での開催という特異な大会をどのようにみるか。特別寄稿として本学の松浪健四郎理事長にスポーツ人類学者としての目と政治家としての経験からの論評をいただきました。

特集論文は1編ですが、東京大会の医療記録を記した成田 & 梶論文は、開催が決まってから約7年ものあいだ揺れ続けた暑さ対策と新たに持ちあがったパンデミック問題に立ち向かった記録となっています。おそらく時間が経過するとともに、東京大会を冷静に記録した本稿の知見が価値をもってくると考えられます。原著論文は3編が掲載されました。オリンピックの特徴として「オリンピックヤード」があります。尾川論文は金メダリストにとってのオリンピックヤードを論じており、歴史的にも思想的にも示唆に富む内容となっています。Wada & Monnin 論文はフランスのオリンピック教育に関するもので、ほとんど日本では知られていない情報が含まれているのではないのでしょうか。今後、日本との比較などオリンピック教育研究への貢献が期待されます。清宮他論文は東京大会のボランティアに関するもので、現代スポーツで重要な役割を担っているスポーツボランティアに関して参加する側、組織する側の双方に示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

暗い時代の大会における希望は、なんといっても選手たちの達成する姿です。今号でも研究所のプロジェクトの一環として、本学関係のオリンピック・パラリンピアンの方々からの記録を取ることができました。

さらに大会体験記では3名の方が記事を寄せて下さいました。1964年の東京大会に日本体育大学は選手、役員の両方で多大な貢献をなしたといわれています。しかし、それらについて残されている記録は少なく、当時の選手やコーチ、役員の活動を具体的に把握することは困難であることも事実なのです。そこで今号は2020年大会の3つの現場に携わった方から寄稿いただきました。研究ノートは4編で、いずれも萌芽的内容を含んでいます。研究プロジェクト報告は2年計画の1年目で、次号への投稿につながることを期待されます。

最後になりますが、原稿を寄稿いただいた皆様、審査の労をとってくださいました方々にお礼申し上げます。

編集委員長 関根 正美